

“セレンディピティー”の真意

True Meaning of “Serendipity”

原 公彦

京都大学低温物質科学研究センター

Kimihiko Hara

Research Center for Low Temperature and Materials Sciences, Kyoto University

セレンディピティー (Serendipity) という言葉は、直接この語を表題とする本が出版されている [1,2] など、特に化学者の間では市民権を得ているようである。現在のオックスフォード英語辞典 (1989 年第二版) によると「偶然と賢明さに助けられて、探し求めていたものでない良いものを見つける天賦の才能」とある。

もともとこれは造語で、その語源を調べてみると面白い。1974 年、英国の著述家 Horace Walpole が友人の英国領事に送った手紙の中で “The Three Princes of Serendip” というお伽話を引用して使われたことに由来するとされている。Serendip というのはセイロン (現在のスリランカ) の古称である。スリランカ大使館の人によるとこれはスリランカでは誰もが知っているお伽話だということである。探してもらったところが、何故かスリランカには出版されたものが見つからないという返事が返ってきたのは意外だった。1557 年イタリアで出版されたもの [3] が原本として引用されている。1964 年に原著を踏まえているが大胆に子供向きに手を加えたとされる英語版が出ている [4]。勿論絶版となっている。数年前私はその古本を入手した (文末の挿し絵) 結構高い値がついていた。読んでみる限りでは、「注意深く観察しているといろいろなことが推察できるものだ」という位のことであった。さらにその後続く、王子の冒険の話を読んでみても天賦の才能を 3 人の王子が持っていたということを読み取るには困難なように思われた。

1965 年に T. G. Remer という人がこの語の持つリズムと魅力にとりつかれて、原典の英訳と合わせて “Serendipity and the Three Princes” [5] という本を出版し、その中でセレンディピティーを次のように定義付けている。「研究者は問題に対する解答、あるいは仮説に対する証明を求めて研究を行う。偶然に恵まれて目的を達する場合もあるが、それはたまたま掘り出し物が出てきたとしても、それを即座に認識する心の準備、条件付けができていたからである。研究の全過程において、ゴールに達するための手がかりはないかと油断なく見張り続けていたからである。かすかな手がかりでも抜かり無くそれに気付くには勿論高い知性が必要であろう。しかし、ある問題の解決を目指して探究を続けている研究者が、全く別の発見をなし得るためには、より高度の何ものかがなければならぬ。この高度の知性こそ Walpole が語った “accidental sagacity” であり “serendipity” に他ならない。これは洞察、天啓、ひらめき、靈感なども表現されてきたものである。この捕らえ所のないものこそが天賦の才に恵まれた研究者の精神をより高い次元の認識状態に飛躍させるのである。」どうもここで「高度の知性」、「天賦の才」が強調されるようになったようである。

「高度の知性」、「天賦の才」などと言われると、とても自分には無縁のことと尻込みする人も多い

ことと思う。しかしながら、「狙い定めて研究を続けていた所、予期しない現象や結果に遭遇し予想外の発見や発展をみて、達成できた」という人は多いと思う。このことを R. M. Roberts [1] は“擬セレンディピティー”という言葉を使って、真のセレンディピティーと区別している。言葉は生きているもので、使っていく内に変化していくものであり、また、多く使われる言葉ほど変化するのも常である。Serendipity が擬セレンディピティーを意味するものとなっても良いのかも知れない。ただ、多くの人は Roberts のいう“擬セレンディピティー” という意味でセレンディピティーと言っているようである。

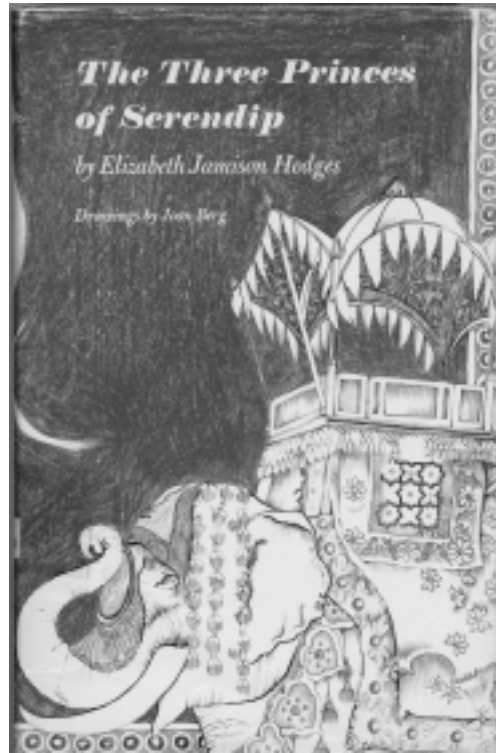
科学の発展はなかなか予測し難いものである。最も面白い科学は未知の領域で見つかるものだ。ところが科学研究費などの研究計画調書を書く時は現在の知識に基づいて書くのであって、未知の知識に基づくわけにはいかないのは事実である。しかし、研究の新しい展開は、セレンディピティー的であれ計画的であれ、重要なこととして強調したいのは、背景としての知性あるいは基礎的な知識の累積である。また、コンピューターの発展に伴う計測測定さらに解析の自動化は研究者の単純作業から解放してくれた反面、セレンディピティーを発揮する機会を狭めることになったかも知れない。

私は研究室が本部構内にあり、昼食は中央生協食堂を利用することが多く、食事をしながら工学部の先生と話をする機会に恵まれた。材料工学の小岩昌宏先生（名誉教授）もそのお一人で、このことに大変興味を持っておられ、多くの事をご教示いただいた [6]。

私は理学部（理学研究科）化学教室には 1962 年から実に 40 年間お世話になった。高圧、超高圧を用いた物理化学の分野において、真擬を問わずセレンディピティーの夢を追って実験研究に携わってきた。その間液体窒素を使った実験を行わなかった訳ではないが、低温、極低温を標榜した研究は行っていない。2002 年 4 月、それまでの機器分析センターと極低温研究室が改組となって低温物質研究センターが発足した。低温科学と物質科学の研究センターである。私は物質科学の研究部門のメンバーとして加わった。ともあれ、人との出会いこそ人生の最大のセレンディピティーであったと思っている。この 3 月末で停年となった。短い期間であったが、最後に、本センターのスタッフ、協議委員、運営委員など関係諸氏のご協力に感謝すると共に、これからの発展を願うばかりである。

参考文献

- [1] R. M. Roberts, “Serendipity ; Additional Discoveries in Science”, John Wiley & Sons, Inc., (1989) (安藤訳「セレンディピティー 思いがけない発明・発見のドラマ」化学同人 (1993))
- [2] G. シャピロ著, 新関訳「創造的発見と偶然 科学におけるセレンディピティー」東京化学同人 (1993)
- [3] “Peregrinaggio di tre figlioli del re di Serendippo” (1557)
- [4] E. J. Hodges, “The Three Princes of Serendip”, Atheneum, New York (1964).
- [5] T. G. Remer, “Serendipity and the Three Princes”, University of Oklahoma Press (1965).
- [6] 小岩昌宏, 京都大学工学部報, 21 巻, 4 月 (1994)



“The Three Princes of Serendip”(1964)